

# 一養護教諭の実践研究報告から捉えられる養護実践の活動過程

斉藤 ふくみ\*・嶋津 貴子\*\*

## A Course of Activities on Educational Healthcare Practice Derived from Practical Research Conducted by a Yogo Teacher

Fukumi SARTO and Takako SHIMAZU

### はじめに

養護実践は、養護教諭が行う実践活動と解することができる。後藤<sup>1)</sup>は、養護教諭の実践の課題は、「子どもの発育・発達への貢献」という教育活動としての中身を問うことといえるとして、「養護教諭の実践」という表現には深い意味が込められており、単純に実際の活動を実践と呼ぶことは憚れると述べている。養護教諭の実践活動という言葉は、1994年第41回日本学校保健学会の一般発表演題の中に見出される<sup>2)-4)</sup>。また、1997年第44回日本学校保健学会長向井ら<sup>5)</sup>の挨拶文の中で「学校保健のもつ教育機能(活動)の独自性を教育科学の側面から解明するためには、学校保健活動の中核としての養護教諭の実践に期待するところ余りある」と述べ、養護教諭の実践は一層注目されてきた。その後、養護教諭の実践活動に関する研究が積み重ねられている<sup>6)7)</sup>。

盛<sup>8)</sup>は、養護教諭の活動過程を「1. 実態把握・問題発見」「2. 問題構造の明確化、発生要因の分析」「3. 問題の共有化と教育目標、教育計画との相互関連」「4. 学校保健・安全計画や個別的支援計画の見直しと修正」「5. 計画の実施」「6. 評価」の6項目に分類した。これは、小倉<sup>9)10)</sup>の提唱した学校保健活動の過程(1. 問題の発見と選定 2. 学校保健診断 3. 計画化 4. 実施 5. 評価)をベースにしたものである。さらに盛<sup>11)</sup>は、2000年には、先の6つの養護教諭の活動過程を、養護活動の過程として第1段階から第6段階まで段階に分けて修正している。このように養護教諭の活動過程を段階を踏んで捉えることは、個々の養護実践活動を検証する際に有用である。

熊本大学教育学部附属中学校では、「気づきから実践までの『考える力』を育成するために」を研究主題に掲げて、平成15年度より3年継続で研究が深

められている。平成17年度は、健康教育領域において、自律的健康管理能力の向上を目指して、養護教諭の実践活動に根ざした研究が進められており、授業実践研究会でS養護教諭よりその成果が報告された。発表の随所に養護教諭の実践を問い直す重要な事柄がちりばめられていた。本研究は、S養護教諭の実践研究報告を、盛による養護活動の過程を基に検証して、何が養護教諭の専門性であり、実践者として求められているものは何か、さらに実践活動を支えている原動力を探ることとする。

### 対象および方法

S養護教諭が、平成17年度熊本大学教育学部附属中学校授業実践研究会健康教育分科会で報告した実践研究報告<sup>12)</sup>を研究対象とする。方法は、内容分析手法<sup>13)</sup>を用い、報告に記された文字(データ)を忠実に養護活動の過程のプロセスに添って分析した。合わせて、活動過程に対応した養護教諭の思考過程<sup>14)</sup>も検証した。

### 結果および考察

#### 1. S養護教諭の実践研究の枠組み

S養護教諭は、研究主題を「健康を『自ら考え、つくる』生徒の育成～自律的健康管理能力の向上をめざして～」と設定した。自律的は、「自分で自分の行為を規制すること、外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること」<sup>15)</sup>の意味から、社会的な意味を持つ自立的と異なり、自らを律する(コントロールする)という、より個人的な意味内容を持っている。

研究の枠組みは、「基本的な生活リズムを自らつくりだす能力を育成する」ことを目的として、「生涯にわたる健康な体の維持」と「自己受容感・自己肯定感」の実現を目指して、そのための養護実践活動の柱を「保健室の機能を生かした、健康を『自ら考え、つくる』生徒への支援」と立てた。実践研究報告は、ヘルスチェックシートの活用、生活リズム

\* 熊本大学養護教諭特別科

\*\* 熊本大学教育学部附属中学校

の振り返りシートの活用, 保健室来室時の対応, 本校養護教諭に求められる役割の4つの項目で構成されていた。

## 2. S養護教諭の養護実践の活動過程と思考過程

### 1) ヘルスチェックシートの活用

ヘルスチェックシートの活用における養護実践の活動過程を表1に示した。活動過程は目的—動機—工夫—気づき・確認—分析・判断—支援・実践—変容の流れとなっていた。対象は、初めは生徒であり、その後保護者が加わっている。S養護教諭は、赴任後生徒の様子を観察し始め(実態把握)、ヘルスチェックシートを活用する目的を「自分の基本的な生活をまず気づき感じる」と設定した。S養護教諭は、質問の仕方を修正することにより生徒が自分を振り返ることができるなどの工夫をしながら実践し、3割の生徒が自分で起きられないという実態に気づいた。このことから保護者の思いや認識を確認している。データとして示された生徒の実態を分析・判断し、生徒が自分の生活をコントロールしていくための支援が必要と感じ、支援の必要な生徒に声かけの実践を行っている。その結果、生活リズムを意識する生徒が増えてきたなどの生徒の変容を捉え、更に生徒の健康な生活の見直しに保護者を巻き込むという養護実践活動の発展を確認できた。このような活動過程を通して、思考しながら実践する養護教諭の姿を捉えることができた。

### 2) 生活リズムの振り返りシートの活用

生活リズムの振り返りシートの活用における養護実践の活動過程を表2に示した。活動過程は、目的—動機—気づき—分析・判断—支援・実践—実態—判断・分析—支援のあり方—変容—願いの流れになっていた。対象は生徒であった。生活リズムの振り返りシートの活用の目的を「1学期の生活を振り返り、健康な生活が送れているか自己評価を行う」と設定し実践する中で、S養護教諭は生徒の自己評価と生活のしかたの実行面で食い違いがあることに気づいた。そのことから、生徒に基本的な生活リズムを押し付ける(型にはめる)というよりも、むしろ自分の健康状態や環境の変化に適した生活リズムを自分でコントロールする力を身につけさせることが重要であると分析・判断した。これは、より自校の生徒の実態を捉えた判断といえる。さらに支援・実践を行っていき、その中で把握された生徒の実態を深く分析し、時間的な余裕がない中でも心のゆとりを持つ努力をしている生徒の姿を認め、そのことはS養護教諭の支援のあり方にも変化をもたら

している。結果として、生徒がそれぞれの時間を利用し、規則正しい生活を心がける様子を捉えている。最後の「願い」では、生徒の実情を十分理解した上で、夏休み中の健康管理と生徒の自律的な管理能力と表現能力の育成を願い、生徒の将来を見通した養護教諭の思いが表現されていた。

### 3) 保健室来室時の対応

保健室来室時の対応における養護実践の活動過程を表3に示した。活動過程は、実態—分析・判断—支援のあり方—省察—一次なる支援—変容の流れが認められた。対象は生徒であった。生徒は保健室来室時に痛みを訴えたり、薬を要求するという実態から、これが中学生のあるべき姿なのかと感じ、生徒は自分の健康状態の原因を十分に理解しておらず、健康に関する認識が低いと分析・判断していた。生徒への支援のあり方を思考し、実践するも、「保健室に来室した短時間に、このことを伝えるには時間が足りず、生徒には十分理解できず、ただ説明のようになってしまわないか心配もある」と記述している。この部分は、自らの実践活動を振り返り、問題点は何かを追究する姿であり、省察(自分自身を省みて考えめぐらすこと)<sup>16)</sup>に該当した。その後、S養護教諭は、生徒一人ずつに少しずつ丁寧に向き合うという支援につなげていき、結果として、生徒が現在の健康状態の原因には生活リズムが関係していなかったかを考えて来室するという生徒の変容を捉えた。

### 4) 本校養護教諭に求められる役割

「本校養護教諭に求められる役割」におけるS養護教諭の思考過程を表4に示した。思考過程は、省察・問いかけ—実態把握—結果—分析・判断—養護実践活動の目標—養護教諭の願いの流れが認められた。対象は、養護教諭である。思考過程の初めには、「保健室の機能を生かし、養護教諭の役割を充分実践できているだろうか」「中学校の養護教諭としての役割は何か大切になるだろうか」という省察・自らへの問いかけを行っていた。そこで、同僚に対して「養護教諭の役割をどのように求めているか」と尋ね、①健康相談に関すること②学校保健情報の把握に関すること③保健指導・保健学習に関することの3点を把握した。この結果を受けて、職員は「生徒の様々な健康問題における支援が必要であると考えている」と分析・判断し、養護実践活動の目標を設定した。このように職員に尋ねることは、生徒の実態把握をするだけでなく、共に教育活動を行っていく同僚が捉える生徒の健康実態を把握することに

表1 ヘルスチェックシートの活用における養護実践の活動過程

対象	活動過程						
	目的	動機	工夫	気づき・確認	分析・判断	支援・実践	変容
生徒	自分の基本的な生活をまず気づき感じる	体育大会までの健康管理にも十分な効果があると思い実施した	「自分で起きたか」「今日の気分はどんな気分か」と聞くことによって、自分の行動を振り返ることができると考えた	全体的に7割ほどの生徒が自分で起きていることがわかったが、3割の生徒が自分で起きられていない	自分で起き、さらに気分良くスッキリ目覚められるよう自分の生活をコントロールしていくための支援が必要だと感じた		
生徒				就寝時間別に見ると、12時以降に就寝している生徒は、自分で起きている割合や朝気分よく起きている割合が少なくなっている。しかし、就寝時間による差があまりないことに驚いた	本来、成長期に重要な睡眠の必要性を指導する中で、就寝時間が遅い生徒の生活リズムには“おかしさ”はないか探ることが大切であると感じる		
生徒				1年生、2年生、3年生の就寝時間の平均	睡眠のリズムについては、2年生から3年生になる時期にどのリズムが自分の体や心に適しているか、考え、選択することが、その後の健康な生活につながるのではないかと考えられる	この「ヘルスチェック」を行うことで個人個人の生活リズムを把握することができ、心身に負担のある生活を送っている生徒や生活リズムの時間や順番の乱れやすい生徒への声かけができるようになった	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で生活リズムを目で見て確認することで、生活リズムを意識する生徒が増えたためか、体育大会当日のケガや病気の数は昨年度より大変少なかった</li> <li>毎日の「ヘルスチェック」が単調にならないように、体の調子の欄などに詳しく関心を持ちながら記録している様子が伺えた</li> </ul>
保護者				<ul style="list-style-type: none"> <li>我が子の生活を把握していない</li> <li>不規則な生活を心配する</li> </ul>	家庭と協力した健康教育を行う必要性を感じた		「ヘルスチェック」を保護者に一度返すことで、家庭での生活の見直しにも参考になっている様子だった

表2 生活リズムの振り返りシートの活用における養護実践の活動過程

対象	活動過程									願い
	目的	動機	気づき	分析・判断	支援・実践	実態	分析・判断	支援のあり方	変容	
生徒	1学期の生活を振り返り、健康な生活が送れているか自己評価を行う	自分の健康や生活を考え生きているか確認する意味でも重要であると考え	推測していたとおり、評価の中で「健康」と答える生徒も、生活リズムは、「良くない」と認めている生徒が多い事がわかった	・生活リズムは悪いが、健康に過ごせるということである。生活リズムは、一般的に「良い」とされる習慣ではないが、自分の体や心に無理がなく、毎日または週として良いリズムの継続がある生活ができている事で健康であることへの評価につなげられるのではないかと考える ・多様化した、時間に追われている中学生に、基本的な生活の生活リズムを押しつけることは、無理が生じるが、自律という意味でも、健康状態や環境の変化に適した生活リズムを自分でコントロールした生活を継続していくことが個人の力をつけるものとする						
生徒		時間に追われた生活でも、リラックスできる時間は不可欠だ			心のゆとりを持てる「好きな時間」を確認した	「好きな時間」が →趣味の時間や習い事  →寝ているとき →テレビや自由な時間	→心にゆとりのある生活を送っている →生活の忙しさを感じさせる →楽しんでいる			
生徒					生徒に自分の生活リズムを振り返りアドバイスを考えさせる。夏休みを健康に過ごすための生活目標を考えさせる	ほとんどが睡眠時間の確保に関してであった。夏休みの生活も「早寝早起き」を目標にしている生徒は多い	生徒は時間の使い方を考えなければならぬとわかっているが、実際に態度で表す事が難しいのだろう	時間の使い方に工夫(が必要だと)感じる	それぞれに時間を利用し、規則正しい生活を心がける様子が伺える	夏休みは目標や課題を自分で作り発見し健康管理を続けてほしい。夏休みだからこそ、意識し自律的な管理を十分実践し表現能力を身につけてほしい

表3 保健室来室時の対応における養護実践の活動過程

対象	活動過程					
	実態	分析・判断	支援のあり方	省察	次なる支援	変容
生徒	生徒は保健室に来て症状を訴えるとき、「先生、頭が痛いです」「先生、おなかが痛いです」「先生、足が痛いです」など痛みを訴えてくることが多い	果たして、これが中学生のあるべき姿なのか不安に感じた 頭が痛い、おなかが痛い、足が痛い原因など自分で考え、伝える意志がなく、一つ一つ誘導していく必要がある 健康に関する意識が低いことが顕著に感じられた		保健室に来室した短時間に、このことを伝えるには、時間が足りず、生徒には十分理解できず、ただ説明のようになってしまわないか心配もある	1人ずつ、少しずつ原因を見つめ、抵抗力や免疫力を高める事を伝える必要がある	最近は、少しずつであるが、「早く寝たけど、風邪をひいていて頭が痛いです」「朝ご飯を食べていないから、気分が悪いです」など現在の健康状態の原因に生活リズムの関係はなかったか考えて、来室する生徒も増えている
生徒	「薬をください」と来室する生徒も多い	自分の健康状態の原因を十分に理解し、分析できていないで、ただ症状が良くなるように内服薬に依存している	人間には、薬にはない強い回復力があることを十分に知ってもらいたいと考える			

表4 「本校養護教諭に求められる役割」におけるS養護教諭の思考過程

対象	思考過程					養護教諭の願い		
	省察・問いかけ	実態把握	結果	分析・判断	養護実践活動の目標	生徒観	健康観	養護教諭観
養護教諭 (自分自身)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健室の機能を生かし、養護教諭の役割を充分実践できているだろうか</li> <li>・中学校の養護教諭としての役割は何か大切になるだろうか</li> </ul>	本校職員に「養護教諭の役割をどのようにもとめているか」尋ねた	<ul style="list-style-type: none"> <li>①健康相談に関すること</li> <li>②学校保健情報の把握に関すること</li> <li>③保健指導・保健学習に関すること</li> </ul>	担任や教科担任、職員の多くが、生徒の個別の様々な健康問題における支援が必要であると考えていることが分かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・養護教諭として、個人の健康管理能力を高める支援を行う</li> <li>・担任や教科担任、職員と十分に連携を図る</li> <li>・学校経営の組織の一つとして保健室経営を効果的に行う</li> </ul>	今日における多くの社会的な問題の中で、生徒自身が健康を意識し、考え、つくり、喜びを感じながら、自らの大切な力として育ててほしいと願っている		
						生徒自身が健康であることを喜び、感謝する心を育て、新たな健康課題に立ち向かう力を身につけた生徒	健康は目的ではなく、自己実現のための基礎となる資源である。その健康は、自ら管理し、高め、つくるものである。健康管理能力は、生徒の輝かしい未来を実現するために培うべき必要な力である	養護教諭として、一人ひとりの生徒を大切に、「考える力」の育成に努めた。微力ではあるが今後も養護教諭として生徒の健やかな成長に携わり、共に喜びあっていく養護教諭でありたい

つながり、その学校で養護活動を展開していく養護教諭の基盤の形成につながるものであり示唆に富む。最後にS養護教諭は「養護教諭の願い」を述べており、その願いを形作っているものは確固たる生徒観・健康観・養護教諭観であり、高い実践能力を備えたS養護教諭の養護教諭像<sup>17)</sup>が捉えられるとともに、S養護教諭の実践活動を支えている原動力と思われた。

### 3. S養護教諭の実践研究報告から導かれるもの

盛(2000)による6段階の養護活動の過程は、①健康実態の把握・健康問題の発見②問題構造の明確化③ヘルス・ニーズの共通化④学校保健計画や個人的支援計画の見直し修正⑤実施⑥評価である。S養護教諭の養護実践における活動過程は大まかに目標設定—活動の工夫—実態からの気づき—分析・判断—支援・実践—確認—分析・判断—支援のあり方—省察—次なる支援—変容のプロセスが存在することが確認された。さらに思考過程においては、省察—実態把握—結果—分析・判断—目標設定—養護教諭の願いのプロセスが存在することが確認された。これらの過程は、盛の養護活動の過程と重なる部分とS養護教諭の独自の活動(思考)過程が存在した。それぞれの過程内の項目を繋ぐ矢印は、一方向ではなく逆方向もあり、さらに活動過程から思考過程へ、思考過程から活動過程へ繋がっていく相互関連が認められた(図1)。

盛<sup>18)</sup>は、養護活動の専門性のレベルは、実施の有無ではなく、どのように判断し、どのように実践し、その結果子どもがどのように変容したかに左右されらしている。S養護教諭の実践を丁寧に辿っていくと、6つの過程を進んだり戻ったりしながら、生徒の様子の変化を確認して、支援の修正を行ったり、自らの実践を省察する行為が見出された。ドナルド・ショーン<sup>19)</sup>によると、反省的実践家における専門性とは、活動過程における知と省察それ自体にあるとされる。すなわち「行為の中の省察」が重要な

概念になり、S養護教諭の報告の中に「省察」が見出されたことは、養護実践家である養護教諭の専門性を実証する事実と思われた。教師の行う授業が、生き物であり教師の力量や技術の向上により日々変化しているように、養護教諭の実践活動も養護教諭の行為の中の省察の繰り返しにより、新たなものを創造したり、実践したり、変化していかなければならない。実践的専門家は実践により育っていき、獲得・習得した知識・技術をもって実践することによって生徒に還元する。養護教諭は、自らの能力がそのまま子どもの健康に生きる力を育てることに影響するものであり、大変責任の重い仕事である。それゆえ、常に子どもや職員、子どもを取り巻く社会の情勢を捉え、健康に関わる様々な情報を収集し、子どもの健康の保持増進に役立てながら自ら自己成長していく養護教諭が望まれる。S養護教諭の実践研究報告から、省察し成長していく養護教諭像を見出すことができたと思われる。

### まとめ

平成17年度熊本大学教育学部附属中学校授業実践研究会健康教育分科会において、S養護教諭が発表した実践研究報告の文字(データ)を内容分析することにより、以下の諸点が把握された。

1. S養護教諭の養護実践の活動過程は、目標設定—活動の工夫—実態からの気づき—分析・判断—支援・実践—確認—分析・判断—支援のあり方—省察—次なる支援—変容のプロセスの存在が確認された。
2. S養護教諭の思考過程は、省察—実態把握—結果—分析・判断—目標設定—養護教諭の願いのプロセスの存在が確認された。
3. 活動過程と思考過程のそれぞれの過程内の項目を繋ぐ矢印は、一方向ではなく逆方向もあり、さらに活動過程から思考過程へ、思考過程から活動過程へ繋がっていく相互関連が認められた。
4. S養護教諭の養護実践の活動過程には、実態を

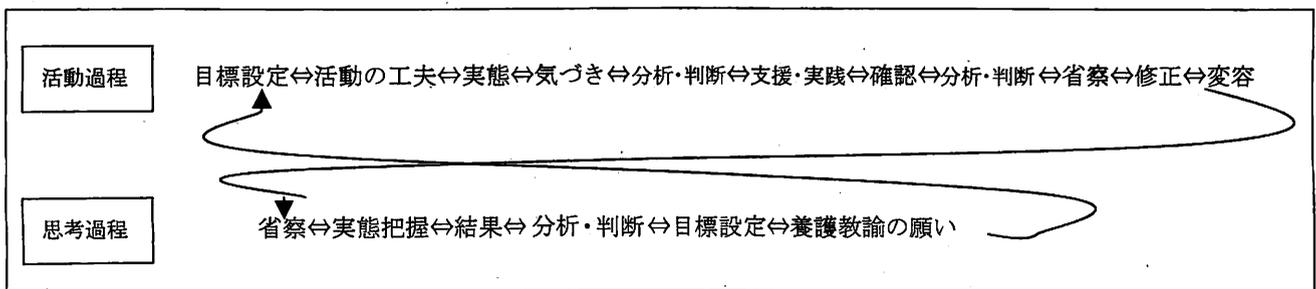


図1 S養護教諭の実践研究報告から導かれた養護実践の活動過程と思考過程

専門的に分析・判断し、子どもの変容を捉えるとともに省察が見出され、養護実践家である養護教諭の専門性が確認された。

## 文 献

- 1) 後藤ひとみ：第8章養護教諭と研究（大谷尚子他「養護学概論」），215，東山書房，京都，2000
- 2) 中丸弘子・藤本比登美：養護教諭の実践活動（第1報）保健室来室生徒へのかかわり，学校保健研究，37，Suppl. 343，1994
- 3) 藤本比登美・中丸弘子：養護教諭の実践活動（第2報）保健室来室生徒へのかかわり，学校保健研究，37，Suppl. 344，1994
- 4) 藤本比登美・中丸弘子：養護教諭の実践活動（第3報）保健室来室生徒へのかかわり，学校保健研究，37，Suppl. 345，1994
- 5) 向井康雄・山本万喜雄：ご参会のみなさんへ，学校保健研究，39，Suppl. 5，1994
- 6) 山崎隆恵・小林冽子・小林央美・斉藤ふくみ他：養護教諭の研究能力に関する研究第2報「研究発表」の分析から，日本養護教諭教育学会誌，3(1)，21-32，2000
- 7) 斉藤ふくみ・堀内久美子：養護教諭に関する学会発表演題の動向—日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から—，熊本大学教育学部紀要，53，123-131，2004
- 8) 盛昭子：第2章養護教諭の専門的機能 第3節養護教諭の活動過程（飯田澄美子・堀内久美子・天野敦子他編「養護活動の基礎」），35-46，1988
- 9) 小倉学：養護教諭その専門性と機能，115-120，東山書房，京都，1979
- 10) 小倉学：学校保健活動，299-322，東山書房，京都，1980
- 11) 盛昭子：第3章養護活動の過程2. 養護活動の過程（大谷尚子他「養護学概論」），44-54，東山書房，京都，2000
- 12) 嶋津貴子：健康教育研究主題「健康を「自ら考え，つくる」生徒の育成～自律的健康管理能力の向上をめざして～」，平成17年度授業実践研究会研究資料集，86-93，熊本大学教育学部附属中学校，2005
- 13) 斉藤ふくみ・宮腰由紀子・津島ひろ江：養護実習記録簿の分析における内容分析の有効性—文献研究を通して—，学校保健研究，47(5)，452-468，2005
- 14) 前掲書8)，35-37
- 15) 新村出編：広辞苑，1225，岩波書店，東京，1986
- 16) 前掲書15)，1320
- 17) 日本学校保健学会「養護教諭の養成教育のあり方」共同研究班：これからの養護教諭の教育，27，東山書房，京都，1994
- 18) 前掲書8)，35
- 19) ドナルド・ショーン（佐藤学他訳）：専門家の知恵，215，ゆみる出版，東京，2001